

【目的】 Eating Disorders (anorexia nervosa および bulimia nervosa) は、近年増加しており、その発症時期が若年あるいは高齢にわたることが報告されている。そこで、小学校の女子児童における、肥満と痩せに関する意識と食行動の実態を知り、併せて、人間関係に対する意識を把握することにより、保健指導に資することを目的とした。

【方法】 某女子大学附属小学校5年生114名、6年生118名全員を対象として、授業時に記名で14項目の調査を行い、その場で回収した。肥満度の評価は、実測体重および身長によるローレル指数100以下をやせすぎ(A)、101～115をやせている(B)、116～145を標準(C)、146～160をふとっている(D)、161以上をふとりすぎ(E)とした。

【結果】 5年生では(A)2.6%、(B)29.8%、(C)58.8%、(D)6.1%、(E)2.6%、6年生では(A)5.9%、(B)38.1%、(C)50.0%、(D)5.1%、(E)0.8%であった。自分の体重をふとりすぎ、あるいはふとっていると答えたものは、5年生では(A+B)の10.8%、(C)の41.8%、(D+E)90.0%であり、6年生では(A+B)の19.2%、(C)の54.2%、(D+E)100%であった。(A+B)のうち、やせたいと思っている者は、5年生20.6%、6年生19.2%で体重に対する誤った認識がみられた。からだつきについて、なんらかのことを言われたことのある者は、5年生50.9%、6年生50.0%であった。(A+B)のうち、ダイエット経験のある者は、5年生14.7%、6年生19.2%であった。以上より小学生においてもやせ願望の傾向があることが認められ、保健指導の重要性が示唆された。